

2019年横浜ナザレン教会聖霊降臨節第七主日礼拝
「幼子のように」詩編131篇

【聖書箇所】

【都に上る歌。ダビデの詩。】01 主よ、わたしの心は驕っていません。わたしの目は高くを見ていません。大き過ぎることを／わたしの及ばぬ驚くべきことを、追い求めません。02 わたしは魂を沈黙させます。わたしの魂を、幼子のように／母の胸にいる幼子のようにします。03 イスラエルよ、主を待ち望め。今も、そしてとこしえに。

コリントⅡ 12:1～10

1 わたしは誇らずにいられません。誇っても無益ですが、主が見せてくださった事と啓示してくださった事について語りましょう。2 わたしは、キリストに結ばれていた一人の人を知っていますが、その人は十四年前、第三の天にまで引き上げられたのです。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。3 わたしはそのような人を知っています。体のままか、体を離れてかは知りません。神がご存じです。4 彼は樂園にまで引き上げられ、人が口にするのを許されない、言い表しえない言葉を耳にしたのです。5 このような人のことをわたしは誇りましょう。しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。6 仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、7 また、あの啓示された事があまりにもすばらしいからです。それで、そのために思い上がることのないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。8 この使いについて、離れ去らせてくださるように、わたしは三度主に願いました。9 すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。10 それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

1 131篇

今日は月に一度の伝道礼拝です。七月のテーマに選んだのは「幼子」です。普段の礼拝で共に聴いていますルカによる福音書で主イエスが弟子たちの信仰をととても喜び、次のように仰ったことが印象に残っているからです。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。」(ルカ 10:21)。「これらのこと」というのは、主イエスの存在が人々の病を癒し神の

国の到来を示すということでした。神は、神の国に生きること、神のご支配の内に生きることを、知恵ある者ではなく幼子のような者に示された、そう主イエスは喜ばれているのです。また、主イエスは別の聖書箇所でこのように言っています。「子ども達を私のところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。」(マルコ福音書 10:14)。「主が喜ばれる幼子のような信仰とはどのようなものだろうか」「『神の国は子どものような者たちのもの』というのはどういう意味だろう」と考えていた時、詩編131篇が浮かんできました。

詩編とは、祈りの詩を集めたもの。祈りの教科書だと言われています。その中でも131篇は、他とは随分違う、個性的な詩です。第一に詩編131篇はとても短く、解説は不要なほど内容も分りやすく思えます。131篇を初めて知った日の夜、私は久しぶりにぐっすりと休めた事を覚えています。もう何の心配事があったかも覚えていないのですが、心にかかる事があり思い悩み夜、床についても寝付けない日々を過ごしていたようです。この詩を読んで心底安心しました。「ああ、私は私の面倒を看ることに何の心配もしなくていいのだ、父なる神が全部引き受けてくださる。母の胸に憩う幼子のように安らかにしてくれるんだ」。131篇を通して神の国に生きる平安と出会いました。今回、「幼子」という事に心を向けている時、あの夜の心からの安堵が甦ってきました。この幼子の平安を皆さんと一緒に分かち合いたいと思います。

2 乳離れした子

131篇を決定づけているのは、2節「母の胸にいる幼子」というイメージでしょう。では、この「幼子」、何歳くらいの子もだと皆さん、思われるでしょうか。実はここの「幼子」とは、乳離れしない生まれたての赤ちゃんというわけではないようです。口語訳ですと、ここは「乳離れしたみどりご」となっています。それは何歳くらいなのか。旧約聖書の有名な預言者、「サムエル」の名前を皆さん聞いた事があるでしょうか。神さまの言いつけで、イスラエルの最初の王サウルや、偉大なダビデ王を王として即位させた預言者として有名です。そのサムエルのお母さんハンナは、ずっと子どもができずに悩み苦しんでいました。その苦しみが極まった時、ハンナは何時間も神さまに熱心に祈りました。心からの願いを神の御前に注ぎだしていたのです。そして「神さま、あなたが私を憐れんで、子どもをお与えくださるなら、その子をあなたに捧げます」と誓います。その後、ハンナにサムエルが産まれました。このため、サムエルは乳離れした時、神殿の祭司にあずけられました。サムエルが三歳の時だと伝えられています。それで、この「乳離れしたみどりご」というのは三歳くらいではないかと、聖書学者達は推測しています。

神さまを信じて生きる者達を、言葉も話せない嬰兒ではなく、乳離れした幼子に喩えるのは、うまい譬えだと思います。生まれたばかりの赤ん坊は、親、特に母親とほぼ一体の存在と言えます。へその緒は切れていますが、乳をくれる親を離れては生きていけません。この親との強固なつながりは、乳離れすると、弱まっていきます。自分で歩けるようになり、親以外の人間と関係を持ち、自分の世界がどんどん広がっていくからです。そして、乳離れしたばかりの子どもには、自分が周りの人とは違うと、「自我」を認識し始めます。父なる神と、私達の関係もまた同じです。創造者なる父と、被造物である私達人間が一体となることはありません。私達は、父なる神との強いつながりの内に一人の存在として立ち始めた幼子だと聖書は語っています。

3 幼子もまた罪人

さて乳離れした幼子は、周りから良い事ばかりは学びません。じょじょに人間のいやらしさを覚え始める頃といえるでしょう。自分のわがままを通そうとして泣きわめき、周囲の人間を自分の思う通りに使おうとするずるさも覚えるでしょう。「子どもは大人とは違い純真無垢だ」と主張するのは、子供について夢だけ見ている人だけ。牧師館の勝手口のすぐ側に幼稚園のブランコがあり、子ども達がブランコで遊んでいます。『誰か、誰か、ブランコ乗おせて！』と調子をつけてお願いするのが霞ヶ丘幼稚園の子ども達に伝わっている一種の伝統のようです。しかし、聴いていますと、友達の願いを無視してブランコに乗り続けている子達がいるのか、ずっと同じ声で『誰か、誰か、ブランコ乗おせて！』と聞こえて来る事がたまにあります。幼子といえども自己中心的なところは、大人とあまり変わらないのでしょう。寧ろ、子どもは、自己中心的な欲望を隠す術を知らないだけにストレートに伝わってきます。聖書にも、「幼子は純真無垢だ」というような賛美は見当たりません。しかし、その一方、「幼子のようにではないと神の国を受け入れられない」と主イエスは仰います。幼子が純真無垢だから、神の国を受け入れられる…というわけではないようです。では、何故、幼子は神の国を受け入れられるのでしょうか。

4 頼るしかない者

乳離れしたばかりの幼子は、自我が芽生えていきますが、自分一人では何かをする事はできません。親など養育してくれる者に頼るしかないのです。私達もそうです。親と乳離れしたばかりの子どもがそうであるように、神なくしては私達は生きていけない…聖書はそう語っています。これは当たり前のことではありません。私達は、通常はこう考えます。「神を知らなくても私達生きていける。現にこうして生きている！」

確かに私達に命を与え、こよなく愛してくださる方を知らずにいても生きていけはするでしょう。しかし、そうであれば、この神を知って生きれば、尚さら、充実した命を生きていけることでしょう。それは、自分はあるのままで生きていいんだ…と思えるように歩みです。自分の存在を無条件に喜ぶことができる命です。人は自分の存在をまるごと受け止める方を知って、より安心して生きることができる、そして、命の根源的な豊かさの内に生きる事ができると私は思います。

5 好奇心旺盛

さて、乳離れした子どもは、なんといっても好奇心旺盛です。周りの世界に興味を示し、新しい事を知って、一日、一日と世界を広げていきます。好奇心旺盛な子どもというと、皆さんもご覧になったことがあるのではないかと思います。アニメ映画の「隣のトトロ」に出て来る妹のメイちゃんを思い出します。このメイちゃんはとても活発で、引っ越して来た田舎の自然、植物や虫、なんでも興味を示し楽しそうに追っかけてひっ捕まえて観察しようとしします。森の妖精のような不思議な生き物「トトロ」と最初に友達になるのも、メイちゃんです。乳離れしたばかりの子どもは楽しむ事の天才のようです。大人のように「あれしちゃだめ、これしちゃダメ」という意識がありません。毎日が冒険旅行。

このメイちゃんの姿は、父なる神を知って喜ぶ私達の姿に通じるものがあると思います。父なる神は私達人間が把握する事ができないお方。その神が造られた世界もそうです。私達自身もそうです。100歳になろうと、101歳の自分は未知の自分。どのような一日も実際はどんな一日になるか私達は知りません。生命は神さまの秘密に満ちています。私達は、毎日、父なる神の見守りのうちに、冒険の旅に旅立つ幼子のように。神を知り、自分を知り、世界を広げる冒険です。全く新しいこと、未だ知らぬ事が私達を待っています。神は手を広げて私達が冒険の旅に出る事を待っておられるのです。

6 「今」を生きる

そして子供は、常に「今」を生きています。皆さんは、松谷みよ子さんの「二人のイーダ」という童話をご存じでしょうか。私の記憶も曖昧なので間違っている所があるかもしれません。あらすじはこうです。瀬戸内海にある島の古い洋館にある「椅子」と出会った直樹という少年のお話し。この「椅子」は、ある日、出かけたきり帰って来ない仲良しの小さい女の子の帰りを待ち続けているうちに話せるようになりました。待っている女の子のあだ名が「イーダ」。この椅子は直樹に「昨日イーダはお父さんと広島に行った。イーダは明日帰ってくると約束した。だから待っている」と話します。主人公の男の子が、「昨日っていつ

さ？」と聞くのですが、椅子には何年前の事かはさっぱり分かりません。物語が進み、椅子が帰りを待っている親子が広島市に行ったのは1945年8月5日、原爆投下の前日であることが明らかになります。原爆から何十年もたっているのに、椅子は、それが分らない。椅子は、仲良しの小さいイーダと同じように、「昨日」「今日」「明日」しか分らないのです。そんなくだりを読んでいる時、幼い頃、小学校に上がる前くらいまで、今日が終わって朝起きたら、「明日」が「今日」になる。そんな「今日」がずっとずっと続くと考えていた事を思い出しました。

乳離れしたばかりの幼子には、「今日」しかない、せいぜい考えられて「明日」まで。幼子は、常に「その時」「その時」を精一杯生きているのです。明日のこと、将来のことを思い悩むような幼子はいません。親や保護者の愛のもとにいる幼子は、将来の事を心配する必要がないからです。色々と将来を心配し思い悩むのは、自分で未来をコントロールできると考える大人だけなのかもしれません。

7 お前は私の幼子ではないのか？

そう、私達は度々、将来を思い悩みます。このような事を説教壇から話すべきではないのかもしれませんが、牧師として教会に仕えるようになってから、教会の将来のことで色々と考えこむことが増えました。教会の将来を考えて、こちらの道を選ぶべきか、もう一方の道を選ぶべきか悩む事もあります。やはりそうした悩みにあった時、毎朝の礼拝でいつものように聖書を読みました。詳しく述べるには時間が足りませんが、古代最大の伝道者にしてキリスト信仰の基礎を築いたともいえる偉大なるパウロが書いたガラテヤ書の1章でした。パウロははじめ熱心なユダヤ教徒で、イエス・キリストを信じる者たちを迫害していました。ところが、彼は復活したイエス・キリストと出会います。そして、人生が180度変えられ、それまで弾圧していたイエス・キリストへの信仰が与えられます。その回心直後のパウロの行動をパウロ自身が記した部分です。そこには「アラビアに引っ込んだ後にダマスコに行った」など、パウロが試行錯誤している記述がありました。「偉大なパウロ先生でさえ、色々と迷いつつ時間をかけて学んでいったんだな。」と思った時、「そうだ、パウロは私の幼子として学んだ。そしてお前もパウロと同じく、私の幼子ではないのか」と神さまに問いかけられているような気持ちがしました。

そう、父なる方は私達に問いかけておられるのだと思います。「あなたは私の幼子だ。幼子なのに何故大人のようにふるまおうとするのだ。幼子のように無心に私に求めないのか、何かを分かったような大人のふりをして、自分の手の内にはない将来を思い悩むのか」。一人前の大人のようなつもり

で、神とは関係なく生きようとする私達を、ご自身のもとで幼子として生きる命に招いているのです。

8 神に希望を置く

さて、この説教の準備のために何人かの旧約学者の注解を読みました。ある学者は、この詩篇131篇の作者が女性ではないかと次のように推測していました。「1節の“大きすぎる”“驚くべきこと”というこの二つの表現は、ここでは周囲の人々が目を見張るような大事業を表しているであろう。謳い手はそのような大事業に関わることなく、ごく平凡に生きた。社会的に大きな仕事を成し遂げるのではなくて、家族を支え、子どもを産み育て、ささやかにつつまじやかに生きた女性が歌った歌であろう」と言うのです。

しかし、私はこの詩編の作者を考える時、社会的に大きな仕事を成し遂げた人かどうか、男性か女性かなどは関係ないように思えます。どのような境遇に生きようとも、詩編131篇は、神を信じて生きる人間の本質を詠っているからです。この詩編の祈りには、先ほど、交読詩編で一緒に読み交わした詩編130篇のような激しい祈りを体験した人がたどり着いた平安があるからです。131篇が歌う幼子の平安にたどりつく前には詩人も烈しく求め、心を悩ませ、長い間、苦闘したのだと思います。そうでなければ、2節に歌われているような深い沈黙、大きな平安にたどり着くことはできないし、1節のように祈れないのではないのでしょうか。1節は、自分が思いあがってしまう高ぶりに長く苦しんだ人が神によって解き放たれた時の自由が感じられます。彼、彼女は今や心砕かれ、心低き者とされ、幼子のように神を信頼する人となり、幼子の自由を得たのです。次々と言葉を継いで自分の願いを神に押し付けるのではなく、父なるお方を仰いで、その愛に根差して、「あなたの御心がなりますように」と願いつつ生きる者となったのです。それによって詩人は初めて信頼という意味を知り、神にすぎる、ということがなんであるかを知ったのだと思います。

それはコリント信徒への手紙Ⅱ12章の使徒パウロの告白に通じるものがあります。今日のもう一か所の聖書箇所です。使徒パウロは、ある日、生きたまま、最高の天に挙げられる幻を体験します。言葉では言い表せないほどの素晴らしい体験だったようです。しかし、パウロがこの事で思いあがらないように…と一つの棘が神から送られて来たと語ります。「棘」とは人が目をひそめるような病気であつたろうと言われていました。パウロはこの病を取り去ってくださるように！と神さまに三度、完全に祈りました。その時、パウロは、神の言葉を聞きます。「私の恵みはあなたに十分である。力は弱さの中にこそ発揮されるのだ」。この神の言葉に打たれたパウロはこのように叫んでいます。「私は弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱い時にこそ強いからです」。「弱い時にこそ、

強い」弱い私に神が働いてくださるから、強い。これこそ、131篇の詩人が、祈りを通じて主に導かれてたどり着いた地点であつたと思わされます。131篇の詩人もパウロのようであつたのでしょうか。この詩人は自分に希望を置く生き方をやめたのです。そして神に希望を置く生き方を見出した。だから、心奢らず、高くを観ない。大きすぎることを、「わたしの及ばぬ驚くべき事」を追い求めません。では、詩人は何を追い求めるのでしょうか。

それは、低きに下った神、自分のすぐ側まで来て寄り添ってくださる方、すぐ近くで導いてくださる方を追い求めるのです。子どもが親の手元をじっと見るように、親の後を「ごめんなさーい」と追っていくように。そして、「今を生きる」のです。幼子のように。その時、その時を精一杯、神を知り自分を知る事を楽しみつつ生きる。そうすれば、私達は自分達の想いもかけぬような事、神の業に参加することができます。一見、人目を引くような大事業ではないかもしれませんが、しかし、必ずや神の国の到来に貢献し、私達の名前は神の心に刻みこまれる事でしょう。

その為に、主イエスは神の身分を後ろに投げ捨て、この地上に降ってくださったのです。そして、十字架についてくださった。私達人間が父なる神とは関係なく生きて行こうとする罪を一人で贖ってくださいました。父なる御神はそのような主イエスを正しい者として甦らせてくださいました。私達が父なる御神の幼子として生きることができるのは、この見えないイエス様が私達の心の内まで降りて来て、小さくなって住んでくださるからです。

9 幼子であり大人であり

神の前に幼子として生き養われてこそ私達は、自分に対して、人に対して、きちんとした責任を果たせる、自立した大人として生きていけるのではないのでしょうか。自分に対して、人に対しての大人としての責任とは何か？それはお互いに大切にしようという事でしょう。お互いに許しあい、共に生きていくことでしょう。父なるお方が幼子である私達を支えてくださるからこそ、私達は大人となれます。安心して、この罪に縛られた世界を、神の幼子の自由に生きる大人として向かい合うことができるのです。今日から始まる七日の旅路、「あなたはわたしの幼子として生きなさい」そう私達に語り掛ける天の父の言葉を聞きつつ、歩んでいきたいと切に願います。